

らい、戦後三年、世情も安定し、それぞれの自立の道を探すことになった。私は母と同居し、なんとか、アバラ屋であったが一軒屋を借り、結婚することになった。

戦災孤児の女性で、私も同情した結果であったが、年令は三十歳をとうに越していた。

私は鉄道員と軍隊生活しか経験がなく、当時国鉄にはなかなか入られなかったのが、警察予備隊が出来たので、なんのタメライもなく応募した。後に自衛隊となり、勤続二十数年におよんだ。定年退職してから、生命保険の外交員をしたが、妻が昭和六十年死亡してからは気力も衰え、最近では体調も思わしくなく、息子や孫に助けってもらっている状況である。

幼くして朝鮮に渡り、兵役、敗戦、引揚げ、その後の生活苦と気がついたら三十路を過ぎ、私の青春は無いも同然であった。今年に入り長期入院二回に及び、人生の峠を越した感慨にふける日も多く、私の人生は暗い道程であったと思われるのではない。あのいまわしい戦争さえなかったら、また違った人生があったと思

う。

この世から戦争をなくしたい。しかし人間のあくなき欲望は無くすることは出来ないだろう。今でも世界各地で戦争がくり返され、人が殺され、物がこわされているのを見るとき、戦争体験者として、悲しさとむなしさが胸にこみあげて来てならない。

## 八月十五日終戦の日、父が重傷

鳥取県 井田明子

昭和二十年八月十五日は私の人生にとって目の前が真暗闇に包まれた忘れられない日となり深い悲しみに沈んだ日でありました。

私の生れ育った今の北朝鮮の元山、ここは日本の陸海軍の要所、父は要塞司令部に勤め八月十五日乗船中機雷で爆破され、危うく一命はとり止めたものの一生松葉杖にすがって歩かなくてはならない人となりました。

その八月十五日日本が負けたと放送された同じ日に父の勤めていた司令部の廻し車で、私の勤めている銀行の開店まもなく、陸軍病院までつれて行かれ、父が手術の最中でだめかも知れない重傷であった。

父の重傷と敗戦と同じ日であったのです。母と手を取り合つて泣いたものでした。

午後三時過ぎ全身を包帯に包まれた父が意識も戻らずコン／＼と眠つたまま、病室に運ばれて来ました。

一緒に負傷をした人達も大勢おりました。麻酔からさめた父は終戦を知らされ、無念の苦しみと自分の重傷とで男泣きをしている父が可哀想でなりませんでした。

その頃日本と中立条約を結んでいたソ連国は国際条約を一方的に破棄し満州・樺太・朝鮮は三十八度線を攻撃し、アツと言つ間に占領してしまいました。

ソ連は八月九日を期して主要都市を空爆、地上軍は戦車を先頭に無抵抗状態の中進撃、(一部応戦した部隊もあったと云う)戦車に歩兵銃では戦いにならず、その進撃は早かった。

占領して来た自動車はアメリカ軍で使われている軍用車で六輪の大型全輪駆動車、中型車、小型のジープなど、初めて見た軍用車。いずれも悪路も平気な全輪駆動には驚いた。

さすがにソ連は機械化している。これでは敗けるのはあたり前と思つてよく見たら、全部の車にUSAが刷り込まれていた。戦車だけはソ連のものであった。

八月十七日ソ連軍はドカ／＼と私の勤めている銀行に入つて来て銀行を封鎖してしまつた。

終戦宣言の八月十五日からは毎日毎日お金をおろす人で銀行の前は長蛇の列、解約事務で大混乱。ついに支払いができなくなつてしまつて、閉鎖すると云う事態に立ち至つた。

一方無抵抗状態の日本軍は武装解除され、丸腰となつた日本兵を苦役に使い、軍用倉庫の鉄道引込線の貨車に毎日毎日ソ連送りの物資を積み込まれていた。物資送りが終つて、こんどは兵隊達のシベリア送りが始まつたのです。

この間アツト云う間のことであつた。九月になつて

城津にいた姉が妊婦で一歳の男の子を連れて、避難民となつて私達の元山の我が家にたどり着いた。兄は捕虜となり、シベリア送りとなつたであろう、連絡はとれない。

長い間の避難生活、現地人の迫害に追われ母乳もでなくなり、乳児は栄養失調と云う悪条件が重なり元体に返るのには大変な期間がかゝつたものです。

陸軍官舎の我が家には、ソ連の女将校が一人入居し部屋を提供した。

治安は悪くなり、ソ連兵を含む現地人の暴動、掠奪、迫害などが横行したが、我が家には女将校が同居していたお蔭で掠奪にも合はず難を逃れました。

やがて引き揚げる時には居抜きのまままで使つてくれと引継ぎ別れて来ました。

そんな混乱の中、二月十一日兄が満州の吉林から脱走して帰つて来ました。姉の喜びはそれはくゞ大変でした。シベリア送りとなつたものと、思っていた夫が元気な姿で戻つて来たのです。ポロくゞの服、お互いに今までの苦難の数々を話し、無事であつたことを喜

び合つたものです。

三十八度線を越えるために、家中の不必要な物を次々と売りお金にしました。韓国人に頼み無蓋車に乗り、漁船の狭いところに二家族押し込まれ、三十八度線を越え、六月二十一日博多に上陸した。

父の本籍地にたどり着いたが、伯母一家は永い在韓生活の父に対する態度は邪魔者扱いと云う感じでした。丸裸の無一文でした当然のことと、思います。

母は引揚げとその後の心労とで、体調をくづし三か月ぐらいで伯母の家を去り大篠津に出ました。私も間もなく結婚して、父母二人淋しく暮らしていたが、母は急性肺炎で二十三年に、亡くなりました。一つぶの梅干を欲しがり、物のない時で、やつと近所の人から頂いて、おいしそうに食べ、借家は一間で何もしやらず、他界しました。

現代のように物の溢れている世の中を一目だけでも見せてやりたかった。母を哀れにも思えてなりません。私の一番気になっている悲しい思い出です。